←卒業生のページ→

スペインでの一こま

長　瀬　睦　子

１５時４０分，バルセロナ発セルベル行の急行はすいていた。ロンドンに働きに行くというアルゼンチンの青年と同室。正月の休暇を利用してのあこがれのスペイン旅行ともこれでさよならだ。そんなことを思いながら通路をぶらぶらし，窓ごしの景色を眺めていると，隣の車室から先刻顔なじみのフランス婦人が，「スペインの空は，なんてきれいなんでしょう。それにひきかえて，パリの空はいつもいつも雨。」と，いささかオーバーとも思える悲しげな表情で話しかけてきた。

灰色のひとみが，親しさをこめてほほえんでいる。５０をちょっと出たほどの年配だ。ベージュ色のオーバー，襟もとの小さなブーケがぽっと明るい。クリスマスの休暇をスペインに遊んだこの人の胸にも，私と同じように，太陽の国スペインをあとにするいろんな思い出がよぎったに違いない。

「グラナダのアルハンブラ宮殿は，むろんごらんになったわね。それからパテオ……。でも，もうあのパテオとよばれる中庭も，都会ではだんだん少なくなって行くんでしょうね。でもあの暑い日ざしをさけるには，あんな石の建物に囲まれた空間が，人々にどんなにいこいをあたえるでしょう。」

パテオは，いってみれば，イスラム時代のおきみやげ。スペインは８世紀のはじめから１５世紀まで，イスラム教徒の支配下にあったため，街のたたずまいや建物などに，その影響が強くのこされている。言葉にしても，アラブ語系が色濃く残っている。たとえばａｌのついた言葉，almoadon（クッション），almaleque（アラビア式マント）などそうである。

「それに，地中海岸のコスタ・デル・ソルでは（太陽の海岸）冬だって海水浴が出来るのよ。私ももうちょっと若かったら……。」といたずらっぽく片目をつぶってみせる。

この美しいフランス婦人がそうであるように，バルセロナではフランス人の観光客がよく目についた。ピレネーを越えたらもうヨーロッパではないといわれている。そんなところから，異国情調と太陽を求めてやってくるのだろう。もっとも，バルセロナは，地理的にもフランスに近く，歴史的な影響もあってここの住民，カタルーニャ人の気質は，いわゆるスペイン人（カスティリャ人，アンダルシア人など）とは違い，どちらかといえばフランス人に近いという。そんなところから，フランス人が多勢，気軽におとづれるのかもしれない。

太陽の国とはいっても，ピレネーや，マドリッド近くのシエラ・デ・グアダラマ，さらには，前記のコスタ・デル・ソルと目と鼻の先のシエラ・ネバダなどは，雪をいただき，絶好のスキー場となってい

る。

フランスとの国境の町イルンからマドリッドにむけての往路，ブルゴスの駅を通過した時，車窓から機関車に給水するホースの先に光っているつららを見て，高原地帯のきびしさを感じたものぞった。ブルゴスはメセタ・ノルテの北東の壁をなすイベリヤ山系の北端にある都市である。マドリッドへの車中ではクリスマスの直ぐ後だったせいもあって，スピーカーからたえずクリスマスカロルが流れていた。この汽車はタルゴ（Tren articulado ligero Goicoechea Oriol の略）の愛称をもつスペイン国鉄の快速列車で，イルン〜マドリッド間を１０時間で走る。多くの観光客が利用するとみえて，車内での放送は西・仏・英・独の四カ国語で行なわれている。

マドリッドに着いて先づ私を，異国への思いに実感としてとらえたのは，街の並木が，豆電球のイルミネーションの花を咲かせてい，街の辻々にはベレン（クリスマスのかざり。幼児キリスト，東方の三賢人，らくだなどの人形など，クリスマスの情景をかたどつたもの）がかざられ，その道をあたかも日本の七夕の夜の街をゆく人々のようにそぞろ歩いてゆく，そんな街や人々のただずまいであった。８時半だというのに街はいっぱいの人で，飾りを眺めてはただぞろぞろと歩いている。なにしろ夕食が夜の１０時だから，８時や９時はまだ宵の口なのだろう。ついでながら言えば，スペインでの朝食は８時から１０時，昼食が２時〜３時，そして昼食時には勤め先からほとんどの人が自宅に帰るから，オフィスなどこの時間はどこもがら空きだ。うっかりこの時間に尋ねても，だから仕事にならない。一度など，地理局に４時近くに行ったら，目先す知人はまだもどっていないという。そんなこともあった。

気がつくと車窓の風景は，夕やみにとけこもうとしていた。荒野のむこうに次の駅のあかりがぽつんと印象的だった。

「さようなら」フランスの婦人がふと，つぶやいた。その目ははるかな想いにぬれていた。「さようなら」と私もそっとつぶやいた。　（１回生）